



イネ縞葉枯病の発生が増えています！ 次作に向けて、秋からの防除を徹底しましょう！

〈症状及び管内の発生状況〉

この病気にかかったイネは、分けつ初期には新葉が退色し、こより状に垂れ下がって枯死します（ゆうれい症状）。分けつ中期以降は葉脈に沿って黄緑色～黄白色の縞状の斑紋を生じます。また、穂が出すくみとなり、籽が奇形になることもあり、発病した穂からの収穫は皆無となります。本病が多発すると収量が大きく低下してしまうことから、徹底した防除が必須です。管内でも、本病が多発したために反収が300kg程度の地域もあり、本病の深刻さが表面化しています。

本病は、ヒメトビウンカによってウイルスが媒介されることで感染が拡がります。発病してしまうと治療ができないため、ヒメトビウンカの適正な防除によって発病を抑えなければなりません。

ヒメトビウンカは、イネ（ひこばえ）やイネ科雑草を好み、これらを住みかとして越冬します。当普及センターが実施したひこばえの調査では、発病株率が非常に高い地域が多く見られました（表）。発病株率が高いひこばえで越冬すると、ヒメトビウンカがウイルスを持つ可能性が高まるため、次年度以降の大発生が懸念されます。



写真1：こより状に垂れ下がった新葉



写真2：穂の出すくみ症状

表：イネ縞葉枯病 発生状況（ひこばえ）

市町村	地区	発病株率*
結城市	田間	90.0%
	芳賀崎	63.5%
八千代町	高崎	93.5%
常総市	内守谷	74.0%
	中山町	60.0%
	館方	40.0%

* 各地区200株ずつ調査

～参考～ 昨年のひこばえ調査結果

結城市：33.3%，八千代町：38.8%，常総市：1.3%

〈防除対策〉

ヒメトビウンカを防除するためには、育苗箱施用薬剤の使用や6月中・下旬の本田防除、7月中下旬の空中散布の年3回の防除が必要です。防除の際には農薬使用基準を遵守し正しく使用してください。本県の農業研究所の調査では、育苗箱施薬や本田防除を正しく行うことで発病を半分以下に抑えられ、減収を

軽減できました。しかし、このような防除はその年の被害を軽減させるだけで、翌年以降の発生を抑制するには不十分です。イネ収穫後のこの時期に秋季耕うんや畦畔の除草を徹底し、感染源およびヒメトビウンカの越冬場所をなくす取り組みが重要です。

**イネ縞葉枯病の蔓延を防ぐために、
以上のようなヒメトビウンカ対策に地域ぐるみで取り組んでいきましょう。**

圃場傾斜化技術及び大豆新品種現地検討会

平成26年11月4日、常総市三坂町において、常総市認定農業者の会を対象として、圃場傾斜化技術及び大豆新品種「里のほほえみ」の実証展示圃現地検討会を開催しました。昨年度レーザーレベラーにより 1/1000の傾斜を施し、実証2年目となる圃場傾斜化技術実証圃は、10月の2つの台風による降雨時にも、慣行区に比べて土壌表面の排水がスムーズで、湿害による影響も最小限に抑えることができ、排水効果の持続性が確認出来ました。

また、青立ち症状が出にくい特性を有する大豆新品種「里のほほえみ」の実証展示栽培に管内で初めて取り組みました。栽培した生産者は「葉が一斉に黄化し、周囲の圃場のタチナガハとははっきりとした違いを感じた」との感想を

述べられました。着莢の位置が「タチナガハ」よりも高めで、さらに裂莢しにくい特性を有していることから、コンバインによる収穫ロスも少なく抑えられることが期待できます。



GAP導入で「あくとなし」のブランド力向上を JA常総ひかり八千代地区梨部会

GAP（農業生産工程管理）とは、生産者自らが生産工程の点検・評価を行い、農産物の安全性の向上、生産者の労働安全の確保を目指す活動のことです。

JA常総ひかり八千代地区梨部会では、8月29日に選果場GAP現地監査、10月10日に生産者GAP現地監査を実施しました。

今年で4年目となる選果場GAP現地監査では、これまでに選果員に対し統一の帽子と手袋の着用を義務付けるなど、異物混入防止に着実な成果を上げています。

今年から取り組みを開始した生産者GAP現地監査では、ナシ部会役員、JA、役場、普及センターで、ナシ生産者3名の自宅作業場を訪

れ、農薬の管理状況等について、チェックリストに基づき確認を行い、改善指導を行いました。

GAPを通してナシ生産における危被害防止の徹底と、八千代町のブランド「あくとなし」のさらなるブランド力の向上が期待されます。



病害虫ノート ハクサイ白斑病 商品価値に影響する病害

葉の表面にできた灰褐色の小さな斑点が、大きさ6~10mmの灰白色や白色の病斑に拡大していきます。病斑ははじめ老葉に発生し、次第に新葉に進みます。

ハクサイの全生育期を通じて発生しますが、特に秋から初冬にかけて多雨の年

に発生が多く、また、連作すると発病が多くなります。

肥料切れに注意することや、発病初期から薬剤防除を徹底し、薬剤散布は葉裏や株元まで丁寧に行うことが防除のポイントです。



★編集者より★ 我が家では、最近シクラメンを育て始めました。シクラメンは、別名“ブタノマンジュウ（豚の饅頭）”とも呼ぶのだそうです。見た目に似合わず面白い名前ですよ。（後藤）